

混住化社会の分析枠組

徳野 貞雄

村落解体論と都市社会学系のコミュニティ形成論の接合点の中から構成しようとする試論的作業である。都市化が、一般的な地域社会の人口移動（増加）、就業構造の変化に規定された地域社会構造の変動を取り扱うのに対し、混住化論は、従来の農村社会の村落構造の存在を前提とし、前記変動要因に規定された土着者と来住者が相互交渉過程の中で、地域社会の構造がどのような規則性をもって変容していくかを明らかにする地域社会過程論として位置づけている。「混住化社会」と云うテーマは、まだ社会学的タイムとして精

製されておらず、一般日常的には、農家を中心として構成されてきた村落社会が、急速かつ多量な非農家の流入によって、従来の村落社会構造の枠組が変容し、住民の生活構造や行動様式、地域意識の変更が迫られている地域空間として把握されている。また「混住化」のタイムも、人口流出による農業生産基盤の悪化、村落社会の統合力の衰退と地域凝集性の低下、人口増大に伴う生活環境水準の悪化、新旧住民間の社会関係の分断希薄化、新旧住民間の地域紛争等々の多様な地域社会現象の原因論的な説明タイムとして用いられているにすぎない。

私は、混住化を地域社会の構造枠組の変容過程として把握、混住化社会の分析レベルは、①地域社会の構成メンバーの変化、②地域住民の就業構造の変化、③地域社会組織の形態変化、④地域住民の社会関係の変化、⑤地域住民の地域意識の変化、⑥地域社会の生活環境要件水準の変化という六つに整理し分析したい。①②は、混住化の発生源因群であり、混住化社会の構造的な規定性をもつ基礎レベルを示す。④⑤⑥は、混住化による結果群であり、現在の混住化社会のコミュニティ状況を示す。そして、③は①②の「構造規定レベル」をどのような④⑤⑥の「コミュニティ状況レベル」に変容させるかの媒介的機能をもつものとして把握する。以上が、混住化社会分析の基本図式である。

具体的な混住化社会の分析図式は、図1に示すごとく、農村系研究からは、A〔①集落の生産基盤の「事実性」の変容分析→②集落の生産関係・生活関係の「事実性」の変容分析→③前住民の集落に対する「規範性」の変容過程分析〕へとベクトルづけられた村落構造論を用いながら、混住化による村落解体過程の進展度を明らかに

する。一方、都市系研究からは、**回**(①来住民の社会的属性・移動経路分析)→**②**来住民の地域に対する「規範性」(コミュニティ・モラル)分析→**③**来住民の地域社会内での社会関係の「事実性」の形成分析→**④**地域社会の生活環境要件分析」というコミュニティ形成論を用いる。そして、**A**・**B**を媒介する過程分析として**回**(①地域組織の形態変容分析)→**②**地域リーダー「構成分析」を導入していく。以上が、混住化社会の内部分析の基本枠組になる。尚、混住化社会分析の要因としては、混住化の初発的・物理的分析としての**回**(①混住化の強度、②宅地開発の形態、③混住化地区の自然的・社会的地位分析)と、混住化の外部条件として**回**混住化地区での行政当局の地域政策のあり方分析(①都市計画法による法制度的な規制のあり方、②行政の町内会・自治会政策のあり方、③公民館活動の状況)の二つの分析を加えておくことが不可欠である。

調査方法は、アンケート調査、モニタリング調査を複合的に組み合わせ、分析から得た知見を、時間性軸の中で、混住化の社会過程を動的に再構成することになる。

〔図1〕 混住化社会分析の基本枠組

